

# サハリン事務所現地レポート

2019年7月

(件名) 廃工場の観光資源としての可能性

報告者：主査 出野 翔大

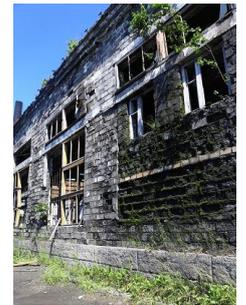
- ・ 長崎県の軍艦島に代表されるように日本には根強い廃墟ファンがあり、ここサハリンの廃工場を題材とした写真集も販売されています。しかしながら現況では、廃工場にスポットを当てたツアーなどは造成されていない状況であり、当事務所では、今後、この廃工場を観光資源の1つとして活用できないか検討材料とするため、現地視察しました。
- ・ 戦前は、北海道の木材に加え、樺太材が国内のパルプ需要を支え、日本の製紙業の発展に貢献したと言われています。最盛期には9つの製紙・パルプ工場が樺太庁内各地で操業しており、戦後も90年代まで操業していた工場もありました。しかしながら現在は、一部倉庫や作業施設として利用されているものもありますが、ほとんどが廃墟と化している状態です。
- ・ 4箇所の製紙工場を訪れましたが、田舎景色の中にそびえ立つ大きな建造物があるという点は今も昔も変わらないものがありました。一見、日本を感じさせる部分は多くありませんが、装飾が施された床やレンガの壁面が樺太時代のまま残っている工場もあります。荒廃した工場からは異様な空気による怖さと美しさを覚え、経過年数を物語る朽ちた姿と生い茂った緑の生命力のギャップ、人工物が自然と同化していく様に魅力を感じました。
- ・ 今回現地調査を行った結果、これらの放置された工場を観光資源に活用できる可能性を十分に感じました。しかしながら、現況、敷地内に入る際には所有者の許可が必要であり、また、老朽化が進み危険な箇所もあることから、安全の確保が大きな課題であると考えます。また、観光資源として魅力を高めるためには、工場が樺太各地へ与えた影響や時代背景、日本の近代産業遺産としての価値などを整理し、発信する必要もあります。
- ・ 事務所としては、今後、この廃工場の観光資源としての可能性や課題についてサハリン州や北海道の観光関係者等と情報共有するなどして、北海道とサハリンとの交流人口の拡大に繋げていきたいと考えています。



ホルムスク(真岡)工場



ドリンスク(落合)工場



コルサコフ(大泊)工場

(件名) 超絶技巧展示会

報告者：主査 長谷川 さゆり

- ・ 7月4日から28日までの間、「超絶技巧展示会」がユジノサハリンスク市内のサハリン州立美術館にて開催されました。
- ・ この展示会は、在ユジノサハリンスク日本国総領事館及びサハリン州文化・公文書省の共催によるもので、日本の高度な職人技と技術によって生み出された54作品が展示されました。
- ・ 内容は「明治時代の工芸品から現代アートまで」「仏像からカプセルフィギュアまで」と時代やジャンルを横断したものとなっていました。中でも多くの来場者の興味を引いていたのが、刺身の盛り合わせ、幕の内弁当、ざるそば等の食品サンプルでした。地元のメディアでも「作品それぞれが技術、創意工夫と表現力に焦点を当てて創作されており、細部の精緻化に細心の注意を払って作られた食品モデルのサンプル等を見ると、その優れた職人技と技術力の高さは明らかである」と報道されていました。
- ・ 同美術館のプリア館長の話によると、サハリンの人は東洋文化、中でも日本の文化・芸術に対し非常に興味を持っているとのことでしたが、今回のように、日本人の物作りへのこだわりや見る人を驚かす高度な技術にスポットを当てた展示は珍しいようで、来場者の熱心に見入る姿が印象的でした。
- ・ 当事務所においても、これまで様々な文化・芸術事業の実施や支援を行ってきましたが、このような切り口の展示は、事業を行う上で参考となる点が多くありました。日露関係のより一層の発展に寄与するために、新たな視点での北海道の魅力の紹介などにも積極的に取り組んでいきたいと思っております。



案内板



会場の様子



食品モデル



訪問客